

優秀賞作品

「KANO～1931 海の向こうの甲子園～」感想文

郭枝蕓

40代 自営業 台湾

2014年、ある映画の宣伝広告がありました。宣伝広告を観ても、元来、スポーツ映画に興味を持たない私としては、ただの映画の一つでした。ところが、絶賛していた友人がとても多かったので映画館に入ってみました。それが『KANO』です。

はじめて観たとき、民族それぞれの球児たちの活躍に笑い、泣き、そして感動しながら、台湾と日本の中にこの素晴らしい歴史があったことも知りました。

この感動を呼ぶ歴史的な関係に思わず、もう1回観ようと映画館に足を運びました。

2回目に観たときは、さらに物語を深く、そして精神性を理解することができました。1回目で感動、2回目で深み、精神性を知ったところでは、いかに奥深い内容をこの映画が分かりやすく表現しているかの証拠であり、中国語で言うと「深入浅出」といったところでしょうか。

私は台湾人、先祖は戦前に中国大陸から来た漢民族です。台湾語しか話そうとしない日本好きの父から「日本精神」の良さを漠然と聞いていたものの、それが何なのかよく意味を理解できずにおりました。

『KANO』では、多くの日本の古き良き精神、私が聞いていた「日本精神」が理解できるように表現されていました。

印象深かったのは、民族の壁を取り払うところから、その違いを、お互いを認めていたところでは、植民地の政治の固定観念に囚われず、近藤兵太郎監督は厳しさと優しさを併せ持って、差別なしで日本人、漢人、原住民の混成チームを導き、それぞれの能力をフルに発揮します。

「番人は足が速い、漢人は打撃が強い、日本人は守備に勝てる、こんなに理想なチームはどこにもない」

との言葉が一番胸に残りました。

民族の垣根を超えるばかりか、さらにそれぞれの民族の長所を見て、その人間に合っ

た場所で努力させ、輝かせる。最近の日本では「一生懸命」と書くそうですが、私が習った日本語の「一所懸命」、与えられた場所を守る、仕事をする、という本来の意味でもあると思います。

球児たちを育て、嘲笑されても我慢し、前向きに甲子園に出場の目標に向かった嘉義農林野球部。台湾代表として、甲子園に出場して準優勝をしますが、そういった平等のチャンスを与えていた日本本土の皆さんの精神性にも感動しました。世界史で習う欧米の植民地などとは、まったく別物だからです。

また、自分たちの勝負の場であり、人間形成の場でもある球場、グラウンドで礼をするのも日本精神だと思います。

この映画を通して、私が日本精神を理解できたことを考えますと、日本統治時代に台湾に残した日本精神が、無意識のうちに私にも伝わったのかも知れません。

より多くの台湾人や日本人だけではなく、世界の多くの人に『KANO』を観てもらい、日本精神がもつ普遍的な人間の善なる行いの事を知ってもらいたいと思っております。

『KANO』観たあと、日本精神をもつ日本人男性と出会い、結婚をしました。

これも映画のお蔭かな・・・ありがとう『KANO』。多謝。